

和歌山県立

もん じょ かん

文書館だまり

第47号 平成28年11月



正月元日、御簾中の装い。髪：おすべ 袴：萌黄地 紅白古代抱鳥（浮織） 袴：緋色（精好）
 「南紀徳川史」巻149（東京大学史料編纂所蔵 謄写本より）

描かれた 紀州藩大奥の装い

堀内信によって編纂された「南紀徳川史」は明治三十二年(一八九九)七月に前編七〇巻が、そして明治三十四年(一九〇一)十月に後編一〇〇巻の浄書・謄写が完成し、一部が紀州徳川家へ納められました。そこには紀州徳川家二五三年にわたる藩政史の記述とともに、数多くの挿絵が描かれ、白黒で印刷されている現在の『南紀徳川史』からは想像もできないような色鮮やかな彩色が施されています。

そのなかの一冊、巻一四九には「大奥御服図」と題して、藩主の正室である御簾中がお召しになっていた、あでやかな「桂」や「打掛」の数々や、「箱せこ」などの懐中物、「笄」や「扇」などの小物

類が巧みに描かれており、紀州藩大奥が存在した当時の華やかな装いを窺うことができます。

この「大奥御服図」にある衣装の数々は、堀内信が、「南紀徳川史」を編纂した明治三十年代当時には、まだ多く残されていたようで、記述に際して「内庭に御保蔵の現品」と、「古老女中の誦説」をもとに「模写したるもの」であることが記されています。但し、これら多くの衣装類は「五節句、式日、或は季節により種々の区別」が複雑で、到底写し切れるものではなく、おおまかに大様を述べたに過ぎない旨が述べられています。

大奥では、奥女中はもちろん、主人側である御簾中にも、その時々にあふさわしい装いが「御衣服定」によって細かく規定されていたのです。

また、衣装の模様・図柄などは、その都度二〜三通りずつの図様を案出させ、

老女の考案裁定を得たうえ

で、京都の織元から調達されていた。

これら
の意匠は「優美・高尚」であり、新案の比ではないと、堀内信は高く評価しています。

同書には、年中を通しての御簾中の装いを記した「御簾中様年中御衣服」も残されています(史料参照)。この史料と、衣装の挿絵である「大奥御服図」から、今回は正月元日の装いをご紹介します。いとおもいます。

【史料】『南紀徳川史』第十六冊
「御簾中様年中御衣服」(抜粋)
一 御髪 すべし
一 御袴 御下召紅梅織 白練り 裏白羽二重白
一 御袴 濃き又は緋 御元服前は濃き色
一 御帯 御袴色に同じ
一 御召替 御二度後
一 御挿取り 総縫入縮緬 色 紫 桃色 萌黄 黒 浅黄 びわ色 紅 裏
一 御鏡御頂戴之節の御挿取り 緋珍御袴

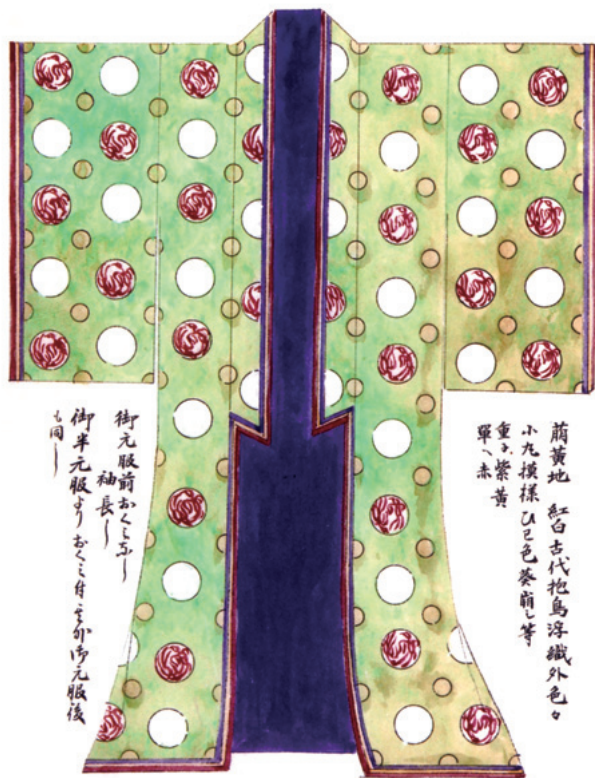


写真2 「御袴」の挿絵

正月元日の御服

表紙の写真は正月元日に、御簾中(元服後)がお召しになった礼装です。

「御簾中様年中御衣服」によれば、正月元日の髪型は「おすべ」、御召服は「御袴」、御下召には「紅梅織」、白練の襦袢、そして「御袴」でした。

1 御袴と御下召、御袴

「袴」は表着と、下に着る単衣との間に着る「内着」という説や、ごく内々で着る略服であることから「内着」と呼ばれたなど、その語源には諸説あります。

袴は同じ形のもを何枚も重ねて着用することが多かったようで、一番上に着る表着は華やかな柄や文様のある生地で作られていました。その下に重ねる袴は襟や袖口からのぞく重なり合った色合いを楽しむために、色が重視されました。「御袴」の挿絵(写真2)では表着に



御袴 御袴濃色長 御相召 紅梅織 白単濃色花菱織模様
御帯 濃色御袴の紐と同中 御下召 白生練裏白二重

写真1 正月元日、御簾中様(元服後)の御服装「南紀徳川史」巻149「大奥御服図」より。
※ここに掲載している写真(表紙と1~8)は、明治38年(1905)に東京大学史料編纂所によって謄写され、同所に保存されてきた「南紀徳川史」巻149「大奥服飾図」から引用しています。

「萌黄地 紅白古代抱鳥」の文様が施されています。この紅白の文様は「浮織」という織り方で織られています。浮織は文様部分の緯糸を浮かせて織られた絹織物の一つです。一見すると生地から文様が浮き上がり、刺繍を施したように見える豪華な織り方です。

これに「重ね」は「紫・黄・単衣赤」の色目をとり合わせています。重ねには「重色目」と呼ばれる様々な色目の組み合わせがあります。人気の高いものには「萌黄の匂」や「紫の薄様」など、雅な名前が付けられています。

仕立ては、裏地が付けられている「袷」で、身幅は反物二つ分の二巾、袖一巾。脇は縫い付けられた縫腋で、袖は袖口の下を縫い合わせない広袖、身丈は足首より長く、後ろに引く長さがありました。

桂のすぐ下には「紅梅織」の御合召を着用しました。紅梅織は経糸を紅、緯糸を白で織った織物ですが、表紙写真の挿絵の注釈には、「桃色ニテ梅折枝浮模様ヲ紅梅織ト云フ」とあることから、この生地にさらに梅の折枝模様を浮き立たせて織りこんだ生地であったと推測されます。

そしてその下には「白練」の御下着をつけました。白練とは絹織物を白くする技法のことです。絹織物は繭から取り出したままの生糸で織ると、糸の回りにあるニカワ成分によって少し黄味がかつた色合いになります。これを精練して黄味を消し去る技法を「白練」と言います。白練を施すと、黄味が消え純白となり、光沢が生まれます。また生地の柔らかさも増しました。

そしてこの白練がほどこされた襦袢の裏地には、「羽二重」が用いられています。羽二重もまた光沢があり、軽く柔らかい風合いの良い高級な絹織物です。

袴は長袴を着用しました。色は緋色(元服後)、生地は精好で、絹を緻密に織った張と光沢のある厚手の生地が使われています。これに同色の帯を合わせました。

絹織物には古くから宮中や、公家の間で独占的に用いられてきた高級絹織物があります。これらは有職織物として珍重されてきました。有職織物には平織や斜文織、振り織や錦などといった種類の織り方があります。

経糸と緯糸が交互に織られた平織のなかで、最も一般的なものが平絹です。この平絹の経に細い糸、緯に太い糸を使って織った厚地の生地が、袴に使われている精好織です。また、刺繍を施したようにみえる「浮織」は斜文織の一つです。

浮織や、精好などの有職織物で仕立てられた桂や袴、白練の生地に羽二重の裏地が付けられた純白の襦袢。

正月一日の御簾中の召し物は、格式の高い新年の行事を執り行うにふさわしい、豪華で伝統的な装いであったといえます。

2 髪型

髪型の「すべし」とは「おすべらかし」のことで、公家女性の髪型として一般に知られています。

おすべらかしは、前髪と、額からこめかみにかけての



写真3 結髪の型紙

髪をふくらませるために髪の内側に、和紙を十数枚、のりで貼り重ねて板のように固くした厚紙、「板目紙」を入れていました。板目紙は髪色になじむように黒く塗られました。この図(写真3)では上部

御髪具

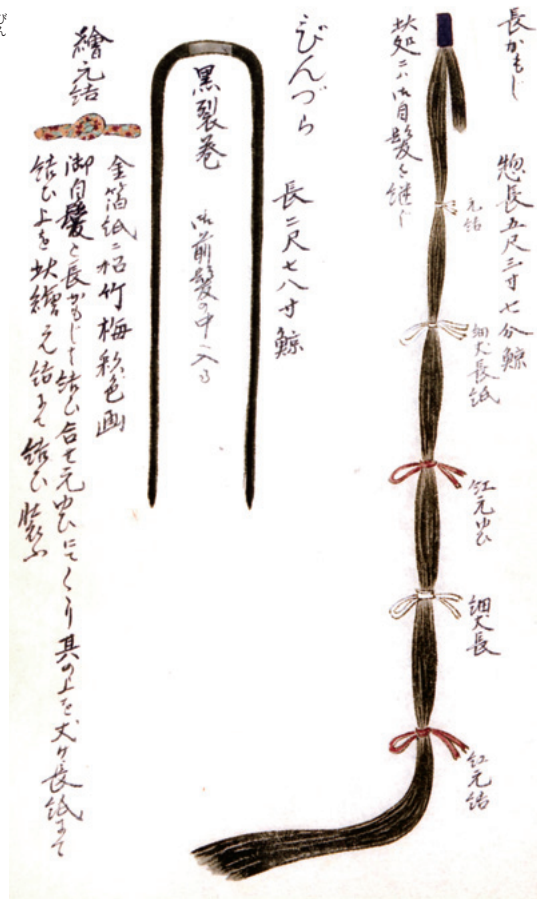


写真4 御髪具

両鬢をふくらませ、後ろでひとまとめにして、背中に長く垂らした結び方です。前髪を分けて結うのを「大すべらかし」、半元服の時に結うのを「すべらかし」、元服前に結うのを「わらわ」と区別されていました。

髪をふくらませるために髪の内側に、和紙を十数枚、のりで貼り重ねて板のように固くした厚紙、「板目紙」を入れていました。板目紙は髪色になじむように黒く塗られました。この図(写真3)では上部

の両側に髪をふくらませるための耳のような形をした張り出た部分がつくられています。注釈には「わらわ髪(童髪か)」とあることから、元服前の髪を結うときに使用された型と思われる。

この台紙に「堅油」をつけて「御自髪」の裏へ粘着せしむ」と書かれています。実際にはどのように装着していたのかは不明です。

さて次に、後ろで固定され、束ねた髪の上に「長かもじ」を結び付けます。

「長かもじ」は写真4にあるように、長いおさげ状の付け髪です。後ろで束ねた自髪の先端に「長かもじ」を継ぎ、元結(紙縊り状に攪り、糊でかためた細い紐)でくくり、その上から「絵元結」を結んで装いました。

「絵元結」は金箔地に松竹梅が描かれ、彩色が施された華やかなつくりになって

いました。

おさげ状の部分は、等間隔に「丈長」(写真5)と元結で結わえます。ここでは「細丈長」と「紅元結」を交互に、片方のみを輪にして結ばれています。

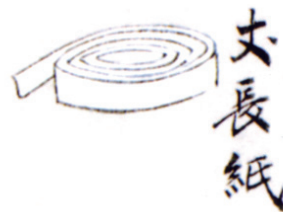


写真5 丈長紙

「長かもじ」の長さは「鯨五尺三寸七分」と記されています。尺貫法の曲尺では一尺は約三〇・三センチメートル換算ですが、ここには「鯨」と記されているので、鯨尺を用いた長さということになります。鯨尺は和裁などに用いられていた尺で、元は鯨の髭でつくられていたそうです。この鯨尺の一尺は曲尺の一・二五倍の約三七・八センチメートルです。これをもとに換算すると、「長かもじ」の長さは約二〇・三・四センチメートル、ということになります。後ろ姿は分りませんが、自身の背丈をゆうに超える長さです。

あつたと思われず。また、さらに髪にも「御びんづら」という添え髪をつけました。御びんづらの中央は黒裂で包んであり、ここを前髪の中へ入れて顔の両側に垂らしました。長さは「鯨二尺七・八寸」とありますから、片側約一メートルほどの長さがあつたものと推測されます。

3 扇

手に持っている扇は檜扇で礼装には欠かせないものでした。顔を隠すときなどにも用いたので「大翳」とも呼ばれたそうです。扇の表には鶴亀松の吉祥絵が極彩色で描かれ、雲形には金が施されています。裏は白地に金の雲形、有識蝶や鳥模様を描かれていたようです。

板の枚数は、年若い人が持つときには親板のほかに二十二枚、位が高く年を取った人が持つときは三十六枚でした。要には金、扇の上部には色とりどりの絹糸で作った造花が取り付けられ、装飾性が高い作りになっています。

両側には房が長く垂れさせられています。写真6の扇では、房の上部は赤、黄、紫、白、薄紅、萌黄で彩られています。房の長さは「くじら九尺二寸」とありますが、手に持った



写真6 扇

姿からは、九尺もある様には思われません。実際にはもう少し短かったのではと推測されます。

正月元日の御作法
髪型を「おすべ」に結び、「御桂」と白練羽二重の襦袢、「御袴」の姿は正月三が日のうちでも元日のみの装いです。裾の長い桂を重ねて着用し、また、その裾の上に垂らした「長かもじ」や、額の両脇に垂した「御鬢づら」などの髪型はかなりの重みもあり、とても動きづらかったのではないかと察せられます。

この衣装で過ごした正月元日にはどんな行事が執り行われたのでしょうか。

同書の巻一三二(刊行本では十四冊)にある「御簾中様年中御作法」によると、正月元日、御簾中様は朝六時(午前五時)に「御目覚め」になった後、髪を「すべし」に結び、桂・袴に着替えると、まず御対面所において御用人と医師の御目見えを受けます。そしてこの後は「およみ初」、「御書初」などの事始めをしました。

四ツ時過ぎ(午前十時頃)になると、表より、藩主が大奥に入るので、それに備えて御対面所では役々の奥女中たちが整列し並んで「御成」を待ちます。程なくすると、元日の装束を召した藩主が、若年寄を御先立に、御側若年寄に御刀を上げさせて御成になるので、御簾中と、上臈・老女二人ずつが御供をして御清間(先祖の位牌が安置されている仏間)を参拝、その後御対面所へ移り「御座所」へ着座します。



図1 和歌山二ノ丸大奥当時御有姿之図(部分)
①御対面所 ②御清の間 ③御座の間

そうすると、一の上臈より元日の御祝儀が述べられ、一統よりも御祝儀が申し上げられます。

これに引き続き、松の枝が飾られた「御熨斗」や、元日の数々の「御規式」に則った御膳が配膳されると、「御長柄」の銚子で酒が注がれ「御三献」の儀が取り交わされます。

御対面所での御祝い式が済むと、次は御座の間に移り二度目の御膳になります。御座の間へ移動する時、通りかけの藩主や御簾中に対して、御目見することが許されない「御三之間」や「御半下」など御目見以下のもので、平伏しながらも主人にまみえることが出来たようです。

御座の間での二度目の御膳が終わった後、桂・袴の装いから「御搔取(打掛)」姿にお召替えになりました(史料)。

年の初めとなる正月元日は、大奥入りする藩主を迎え入れ、先祖へ参拝し、家臣からの祝辞を受ける重要な行事が執り行われます。



元服後 (表紙写真) 写真7
半元服 それぞれの時期の髪型と眉化粧
元服前 (写真1)

武家にとつての正月は、主人への礼と、先祖への参拝、家臣との主従関係を再認識するための重要な機会でした。家臣たちの礼を受けるためにも格式の高い装いが要求されたのです。

元服・半元服・元服前

ところで、「大奥御服図」には「元服後」、「元服前」、そして「半元服」の三様の装いが描かれています。

「元服」は近世武家女性にもさまざまに通過儀礼のひとつとして習慣的にとりおこなわれていました。

通例では、十二〜三歳頃になると鉄漿(お歯黒)を始めます。

鉄漿は、歯を黒く染める化粧です。鉄漿の材料は、ウルシ科のヌルデの木にできる虫瘤を粉碎した五倍子粉と言われる木の粉を、お歯黒水に入れたものです。

お歯黒水は、壺の中に米のとき汁や酒、

茶などを入れ、さらにここに折れた針や錆びた釘などを入れ、三カ月以上寝かして作りしました。このお歯黒液と、五倍子粉を混ぜると、真っ黒なお歯黒の出来上がりとなるのです。主成分はタンニン酸で、これには炎症抑制効果や粘膜保護作用が期待できたようです。

また、鉄漿の他に、眉を剃り落として眉墨で眉を描く眉化粧もはじめました。さらに服装や髪型も時期を追って順次改めていきました。

紀州藩でも、十代藩主治宝の娘の錯姫(信恭院)や、豊姫(鶴樹院・十一代藩主斉順の御簾中)なども十二歳で「御鉄漿」を始めます。この時、眉剃りはせずに鉄漿だけをするのを「半元服」といいました。

写真7は正月元日の御簾中の元服前・半元服・元服後のそれぞれの時期の装いです。

1 髪型

髪型は、三様ともおすべらかしですが、前髪の結い方に違いがみられます。

元服前の「わらわ髪」では、前髪を二筋に取って結び、毛先を両側に流しています。半元服の「すべらかし」では前髪をつくらず、額の両側から耳へかけての鬢の髪とともに膨らみをもたせたあと後ろで束ねています。元服後の「大すべらかし」になると、左右の鬢とは別に前髪だけで丸みを持たせ後ろに流し、膨らませた左右の鬢とともに束ねられているように見えます。前髪の中には「御鬢づら」の中央の黒裂で覆われた部分が結びこまれているでしょう。

2 化粧と化粧道具

大奥でのお化粧は、白粉を塗り、お歯黒をし、紅をさし、眉をつくるのが基本でした。

白粉は水で溶いたものを、顔や首、髪が生え際や襟足、胸元に塗りました。

紅は、紅猪口から紅筆や指に取り、下唇だけに小さく、濃く塗られました。

眉は元服すれば剃り落としますが、半元服では、剃らずにそのまま残します。

そして額には「白キワ」という際化粧を施しています。写真7の右側二人の額に

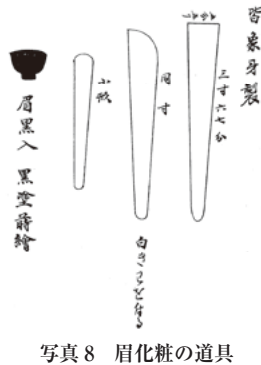


写真8 眉化粧の道具

鍋の弦のような白い曲線が書かれています。これが白キワです。

眉化粧を施すに使った道具は、眉墨と、三種類のへらです。真ん中のへらで白キワをつけました。長さは、三寸六七分で、高価な象牙製でした。また、眉

墨を入れた「眉黒(墨)入」には黒蒔絵が施されていました。(写真8)

元服後は眉を剃り落とし、本来の場所より上の方に「ハ」の字の形に眉を描きました。

3 衣装

「袴」もまた元服前と元服後では形が変わりました。

元服前では「袴」が付かないのですが、半元服の後からは袴が付くようになります。

袴とは襟の下側から裾にかけて付けられた半身の部分です。

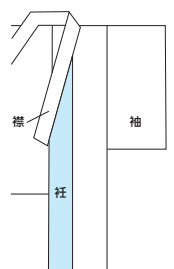


図2 着物略図

写真2の袴には袴がありません。したがって、これは元服前の袴の形です。半元服の後の袴が付いた袴を「たつぷりの方」と呼んでいたようです。

袖は元服後に短くなりました。「袴」には色の違いがありました。元服前では、「濃き色」、元服後は「緋色」となります。

「濃き色」は、濃い紫色、または濃い紅色ですが、濃い蘇芳色、つまり濃いエンジ色のような色合いも指すそうです。

大奥の服制

現在の私たちにとって、衣服には季節の温度変化に合わせた体温調整や身体

保護、衛生といった本来の基本的な機能の他に、自己の好みや、考え方といった「個」をあらわす自己表現の手段の一つでもあります。

もちろん大奥においても、本来の衣服としての実用的な機能はありました。しかしながら、どんなに豪華で高級な着物

であっても、今の私たちがのように個人の意思で自由に衣装を選ぶことはありませんでした。大奥での装いは、ひとめ見れば、その人の身分や役職、年齢、未婚や

既婚などの別がすぐに分かるものでした。服制によって定められた大奥の装いは、

その人、その人の社会的立場を象徴するものであったのです。

(松島 由佳)

明治時代後半期の和歌山市の本屋さんたち

はじめに

いつの時代にあっても、さまざまな情報や知識を広めるための手段として大きな役割を果たしたものに、新聞や雑誌・書物等があります。そしてそれらを、求める人々に簡単に手に入れることができるようにしたのが、全国各地の市町村で営まれていた本屋さんたちでした。

そこでここでは、今までほとんど触れられて来なかった明治時代後半期以降に営業していた、地元和歌山市内の本屋さんについて考えてみることにしましょう。ただ、その際に注意しておいたほうが良いと考えられることに、江戸時代から続いていた本屋さんや明治時代の初期に営業を開始した本屋さん達との関係がどうであったかという点でしょう。

江戸時代から続いていた本屋

江戸時代から続いていて、明治二十年(一八八七)以降にもまだ営業していたことが確認できる本屋さんには、帯屋高市伊兵衛と津田源兵衛及び野田大二郎の三軒だけです。この三軒のうち、津田源兵衛と野田大二郎は江戸時代には坂本屋の屋号で営業していた同一系統の本屋で、それぞれ万寿堂と眉寿堂という堂号を持つっており、江戸時代末期には互いに頑張っていたようです。ただ、この二軒はこの後数奇な運命をたどることになるのですが、それについては別の機会に述べ

ることにしましょう。

一方、帯屋高市伊兵衛は、青霞堂という堂号をもって、多方面に活躍していた実績もあり、歴代の藩公の気に入られ、紀州藩が藩として出版する藩板を、一手に引き受けなければならぬ性格を持たされていきました。それだけに、維新の激動の中で大変な損害を被ったようです。

しかし、そうした時期にあっても辛くも乗り切れたのですから、不思議といえませんが不思議なことだと思われま

す。ただ、この背景には江戸時代末期に帯屋の番頭として奉公していた、平井文助が何等かの役割を果たしたものと考えられます。

つまり、平井文助は正確な年代は判りかねますが、帯屋が所有していた板木を使って時には帯屋文助や本屋文助の名で何点かの書物を次々と売り出しているのです。あるいは、このことが元々の主家である帯屋を救うことになったのかも知れません。

明治前半期に現れた本屋

明治前半期に現れたのは、結局帯屋系と坂本屋系に分かれます。帯屋からは先にも触れた平井文助が、坂本屋系の津田源兵衛からは小野元吉が現れます。

平井文助は、明治元年(一八六八)に帯屋から独立して、五特堂を堂号として本町二丁目二〇番地に店を開くことにな

ります。『紀州萬華鏡』(昭和十一年刊)の著者であり、和歌山県立図書館の司書であった喜多村進は

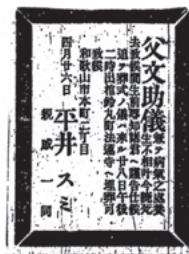
「平井は中々の利権者で、或る時期には、遂に和歌山の書林の筆頭にま

上りつめた、としています。

確かに平井は明治二十年、設立間もない紀伊教育会に早くも賛成員として入会し、自らが発行した『改正教則小学尋常科習字本』と『改正教則小学高等科習字本』をそれぞれ寄附しており、その後も事ある毎に教科書や参考書を寄附しています。

それでも、没年令は不明ですが、明治

図版1 紀伊毎日 M31・4・27



三一年四月廿七日付け「紀伊毎日新聞」紙上に平井スミ名で病死の訃報が掲載され、『紀伊教育』六五号でも彼の追悼広告を掲載しています。

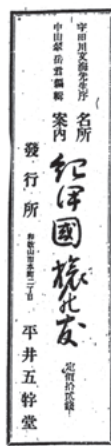
図版2 紀伊教育 65号



ただ、閉店する積もりはなかったようで、その年の八月十一日には平井寿美が商業登記をしており、何点かの書物を出版し続けます。その代表の一つが次に掲げる

『名所案内 紀伊國旅の友』です。

図版3 紀伊毎日 M32・6



ところで、小野元吉については正確な創業年は判明していませんが、『紀伊教育会雑誌』五号(明治二十年十月)に津田源兵衛と並んで『文章軌範釋義』の取次所として名を連ねているので、少なくともこれ以前に創業していたことは確かだと考えられます。

彼は津田の店で修業し、介寿堂を堂号とし、新通一丁目店を構えて独立しました。

宮原藤太郎編『通商便覧 和歌山県之部』(明治四十三年刊)には、この名が登場することと、前述の喜多村が「今尚ほ続いてある」としている点とを考えると、彼は明治期はうまく乗り切っており、さらに大正・昭和期まで続いたと思われる。ただし、昭和十五年以降の『和歌山県教育』に出る書店の広告は、一部を除いてほぼ、後に述べることになる宮井書店と宇治書店の二軒が独占するような状態になりますので、おそらく、小野介寿堂は昭和戦前期のどこかで廃業したのではないかと考えられます。

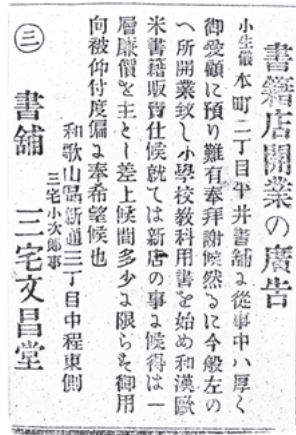
ちなみに、小野元吉が書物を出版していたという形跡は、現状では全く発見できていません。

明治後半期に現れた本屋

明治後半期で最も早く登場する本屋といえ、明治二十二年三月に平井から別家独立を果たした三宅小次郎です。

そのときの、開業広告が明治二十二年三月の『紀伊教育会雑誌』二十二号に見えます。別家というのは、血縁関係に

図版4 紀伊教育会雑誌 22号



ある者を独立させる場合という分家と分けるために使う言葉で、一般的には番頭などを経て独立する者を指します。

ところで、この広告によれば三宅小次郎は新通三丁目中程東側に店を構え、堂号を文昌堂としました。喜多村によれば、彼もかなりの「利け者」で教科書や法律関係書の他に明治三十一年十一月には『木國名勝詩誌』という和歌山の先人が様々な形で残してくれた名勝詩を集めて一冊の本に仕上げられています。

おまけに、彼は津田源兵衛が明治十四年四月に、和歌山方圓社を設立して刊行を始めた『方圓珍聞』という滑稽雑誌の発行を、理由は判りませんが、平井文助が受け継ぐことになった第二十一号から編集の局長を任せられているほどです。

『方圓珍聞』は現在知られている和歌山の雑誌としては最も古いものの一つに数えられますので、何かの機会にこれだけ掘り下げていくことも必要だと考えていますが、ここでは紙数の関係で後に譲ることになります。

同じ頃、新興の松本國助が登場します。その広告が『帝国実業名鑑』に掲載されています。それが次に挙げた図版5ですが、



図版5 帝国実業名鑑 M316

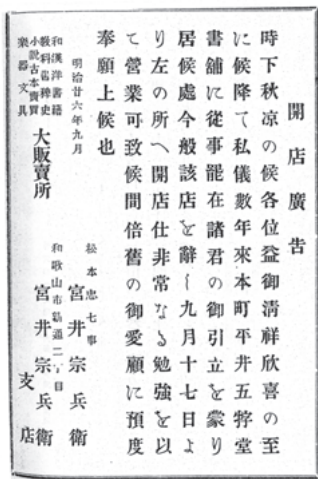
松本は、現状では何処に奉公して独立したのか、それとも何処とも関係なく突然開店したものか全く判っていない本屋の一つであります。ただ、当時の慣習というか慣わしから考えれば、他の本屋と全く関わりがなかったということは考えにくいことです。実際には判りませんが、あるいは津田源兵衛と関係があったのかも知れませんし、または、どこかの古本・貸本を専門とする店から独立したのかも知れません。

松本國助は英文堂を堂号として、明治二十二年に駿河町に店を開きますが、明治三十八年八月に「絵はがき各種」という広告を出しており、津田源兵衛も明治三十八年十月くらいから「内外エハガキ各種」という広告をともし、『紀伊毎日新聞』に出し始めていますから、従来いわ

れてきたような、津田が始めていた絵葉書の「紀伊百景」ほかを模倣する様な感じで、絵葉書の分野にどんどん進出してきた、というようなこととは若干違うような気がします。そして、松本は昭和期まで残ります。

そしてその次に、万を持して現れるのが、明治二十六年九月に『紀伊教育』第十六号に開店広告を出した、宮井宗兵衛です。図版6が、宮井宗兵衛の開店広告です。

図版6 紀伊教育16号 M2610



平井にいた頃は松本忠七を名乗っていたのでしようが、独立を期に改名したのでしょうか。この当時の改姓名はそれほど珍しいことではありませんでしたから。

ただ、驚いたことに宮井宗兵衛は開店の時から既に支店までもっていました。宮井宗兵衛は新通二丁目本店を平安堂の堂号で構え、さらに同時に、同市中橋北詰に支店を開いたのです。もともと本店は書籍・雑誌類中心に取り扱い、

支店は諸新聞を扱うという責任分担を計っていたことは明らかです。

さて、この最後の三宅・松本・宮井の三軒は互いに切磋琢磨して、多くの郷土に残るべき書物を出版しましたが、その内の三宅文昌堂については、昭和十一年以降も残っていたのは確認出来ており、戦後まで続いたようなのですが、はたして、それがいつだったのかははっきりしません。

一方、宮井平安堂は、明治期に現れた本屋ではありませんが老舗である帯伊書店や津田書店と肩を並べて、大いに活躍したのは、記憶に新しいところでもあります。しかし、今まだ営業を続けているのは、既に帯伊・高市書店のみになってしまいました。考えてみますと、坂本屋系から出た津田も帯屋系から独立した三宅も宮井（正確には宮井は玄関は閉じていますが、外商部は健在です。）も今となっては惜しまれながらも閉店を余儀なくされています。寂しいかぎりです。

まどめに代えて

実際は明治期に開業した本屋さんほとんどたくさんあったと思われます。

しかし、一軒だけ追加したい本屋さんがあります。それは明治後期の本屋さんで、梅垣書屋という道場町にあった本屋さんですが、どんな書物を扱っていたのかすらわかりませんので、ここでは、他との関係から取外しました。

(須山高明)



七月から九月にかけて、古文書講座Iを開催しました。

今年の題材は、御坊村に廻ってきた代官や勘定奉行からの触書などを庄屋が書き留めた御坊村「御用留」で、村の暮らしに関わる様々な内容を含んでいます。今回は、その中から、隠居後も藩政を掌握し続けた十代藩主治宝の死やその後の社会の混乱にも焦点をあて、遊佐教寛研究員がわかりやすく解説しました。各回の講座内容は、次のとおりです。

御坊村御用留 三冊目

入門

第1回 子供召し連れ御出揃い 7月30日(土)

第2回 御忌日八日に相成し 8月6日(土)

初級・中級

第1回 御滞留もこれ無く候え共 8月20日(土)

第2回 見世店たて置き 8月27日(土)

第3回 隠密出方と相唱え 9月3日(土)

「入門」には、延べ一三〇名、「初級・中級」は、延べ二〇五名の出席があり、アンケートでは約七割以上の方から「興味深くおもしろかった」との回答をいただきました。

「入門」アンケート(抜粋)

・文字を通じてであるが、江戸時代の生活を教科書よりも感じ取れるような気がしました。



・非常に丁寧に説明してくれたので、古文書を少しづつ理解できていくことの楽しみを感じました。
・難しく考えずに読み下し文から読んでいて良いなど教えていただいたので、楽しく学んで行けるような講座だと思いました。

「初級・中級」アンケート(抜粋)

・「仰せ渡す」の表現が、老中が書いたものだけに使われる等今まで知らなかった事が聞けて良かった。文書自体に誤字脱字があることを解説され、本来の文章を推定されているところは、通常より一歩進んだ解説をされていると思いました。
・何より興味深いのは、藩政時代の紀州藩の様子や当時の世相、各通達類の伝達システムが分かることです。毎回楽しみにしています。



・古文書自体、私にとっては中々難解なものですが、字体の変化の面白さなど感じられ興味深いものがあります。

文書館の利用案内

■ 利用方法



◆ 閲覧室受付にある目録等で必要な資料、文書等を検索し、閲覧申請書に記入のうえ受付に提出してください。文書等利用の受付は閉館30分前までです。

◆ 閲覧室書棚に配架している行政資料、参考資料は自由に閲覧してください。

◆ 複写を希望される場合は、複写承認申請書に記入のうえ受付に提出してください。複写サービスは有料です。

■ 開館時間

- ◆ 火曜日～金曜日 午前10時～午後6時
- ◆ 土・日曜日・祝日及び振替休日 午前10時～午後5時

■ 休館日

- ◆ 月曜日(祝日又は振替休日と重なるときは、その後の平日)
- ◆ 年末年始 12月29日～1月3日
- ◆ 館内整理日 1月4日

- ◆ (月曜日のときは、5日)
- ◆ 2月～12月第2木曜日
- ◆ (祝日と重なるときは、その翌日)
- ◆ 特別整理期間 10日間(年一回)

■ 交通のご案内

- ◆ JR和歌山駅・南海電鉄和歌山市駅からバスで約20分
- ◆ 和歌山バス高松バス停下車徒歩約3分



ホームページアドレス <https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/monjyo/>

和歌山県立文書館だより 第47号

平成28年11月30日 発行
編集・発行 和歌山県立文書館
〒641-1005-1
和歌山市西高松一丁目七-三十八

電話 〇七三-四三六-九五四〇
FAX 〇七三-四三六-九五四一
印刷 有限会社隆文社印刷所